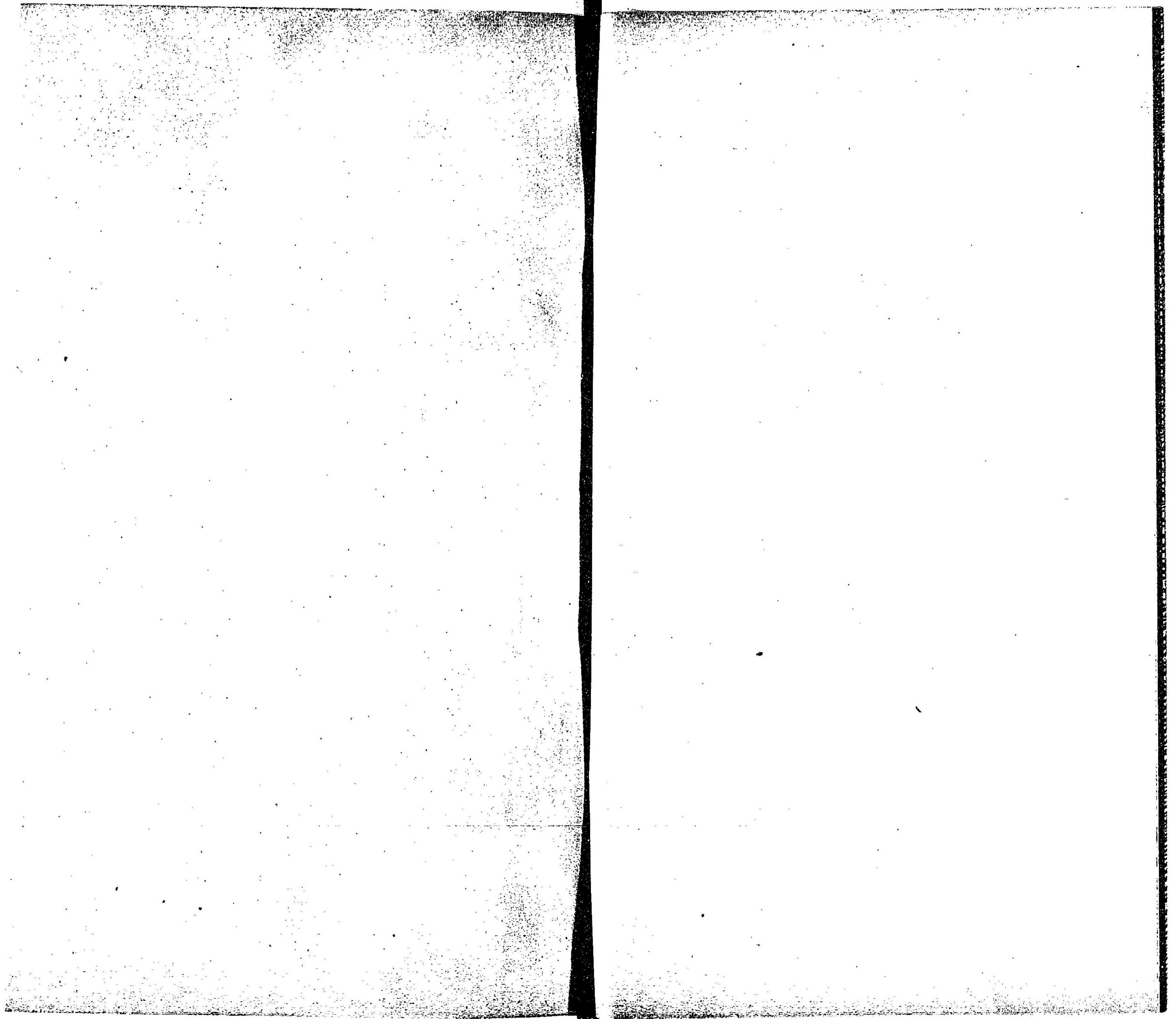


卷八



265  
109







法  
中  
傳  
音  
息  
緒

博

明治  
43. 6. 27  
丙寅



己酉初夏

柳江題



竹林唯七

外園作

君に其身を捧ぐれば

親に不孝の憾みあり

孝に心を委ぬれば

君に不忠の恐れあり

忠孝全たかりざるを

古よりの通患と

世の大方のかこつには

引きか換へたる異竹の

竹林唯七



節はたはしき竹林

唯七隆重と呼ばれは

赤穂の城主内匠頭

浅野長矩の臣下なり

頃は元禄十四の春

主君内匠頭殿は

吉良義典が亡状を

憤りたる短慮より

徳川幕府の殿中にて

一刀所付けたまひしが

世にもいざげき落度にて

公儀の沙汰は無残にも

屠腹の命をぞ下しける

唯七の母は乳母にて

長矩殿を襁褓より

育て申せし事なれば

至悲断腸の思ひにて

老の袂の露一げく

ほりもあへぬ明け暮れを

慰め兼ねぬ唯七が



孝に厚き遠慮より

若くや此まゝ母人の

病にかゝり給はぬか

心や狂ひ給ふらん

朝の嵐の出づきにも

夕の風の入るきにも

心置きつゝ今日と暮れ

明日と明けゆく折ふりに

青の空の月ならうて

最と珍らうも笑顔さへ

憂ひの雲の絶間より

拜まるゝ予のありければ

唯七ひそかに喜びつ

斯ては心安うとて

馳むたもひに行く春の

夢ばかりなる短夜を

鳥の聲に覺されつ

母の臥戸に向へば

枕の下したの韓かん紅こう

唯七いと伏ふしまあひ



這は何故の御自害ぞ

喃ふ母上と抱き起し

さしぬ丈夫の心にも

一期の不覺はらりと

翻す泪の玉柳筥

二聲三聲叫ぶとも

争ぐ答のあるべきぞ

六魂去つて空蟬の

もぬげの殻の側らうに

今宵限りの命毛を

涙に染めし鳥のあと

母は未来の殿様に

死生や三途のた供せん

本望達し給はずして

究天極地の御遺恨を

吞んで過去りたまひたる

御心ばせを察しなば

其覺悟こそありたけれ

我身を捨て其子をば

勵まされたる健氣に



唯七身も世もあらばこそ

痛歎悲憤を方寸の

内に湛へて睜る眼に

五臓をくぼる血の涙

我君のみを親をこそ

刃の錆となつるよ

思へば憎き義典と

純忠至孝の誠には

鬼神も為めに泣きぬらん

至誠の眼は義典を

闇の底より見出し

四十七士の其中に

高名随一と唱はれ

忠孝全たまき梅櫻

花は散りては盡ぬ香の

世に匂ふこそ愛だけ



明治四十二年八月二十日印刷  
全 四十二年八月三十日發行

(非賣品)

發行兼  
印刷者

大阪市東區和泉町二丁目一番地  
有 村 彌 四 郎

印刷所

大阪市東區和泉町二丁目一番地  
藤 井 改 進 堂  
電話 東二七〇番

發行所

大阪市北區東梅田町 邊邑邸内  
大 阪 旭 會  
電話 西二八〇三番



265  
109



